



障害者教育に取り組む現地の教員たちと山本さん(中央)、山本さんは会社員を辞めて協力隊員に。任期終了後は、日本で開発教育にかかわりたいと考えている

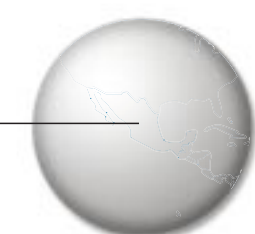
FIELD SKETCH

障害者も社会の一員として生きられるために

近年、国の経済指標が順調に伸びているメキシコだが、その恩恵を受けているのは一握りの人々のみ。国民の半数以上は貧困と低い教育水準のために、社会の底辺に取り残されている。そんな中、特に弱い立場にある障害者のために、2人の青年海外協力隊員が活躍している。

文 = 工藤 律子 (ジャーナリスト)
text by Kudo Ritsuko
写真 = 篠田 有史 (フォトジャーナリスト)
photos by Shinoda Yuji

メキシコ
MEXICO



新聞紙を利用してかごを作る生徒たち(山本さん撮影)

リサイクル工芸で可能性の扉を開く

「ヨウコがリサイクルという新しい発想を教えてくれて、大助かりです」

「特殊教育センター(CAM)No.6」の監督官シルビア・ロベスさん(53)は、満ち足りて話す。首都メキシコ市から北東へ車で約1時間、イダルゴ州パチューカ市にあるこのセンターでは、2005年4月から、青年海外協力隊の山本容子さん(36)が手工芸講師をしている。

13〜42歳の生徒数十人、職員17人のセンターは、同州にある26の「CAM」の中で唯一

「職業訓練」を提供している。廃品を使った工芸を教えるのは山本さんが初めてだ。「普通の工芸だと材料費負担が大きくなることもあり、私は廃品利用にこだわっています」

「普通話」山本さん。これまでに新聞紙でかごを作ったり、ペットボトルを利用した編み機でマフラーを製作したりした。それを見た職員たちは廃品集めに協力し、自分でも製作方法を学ぶようになった。

山本さんは着任当初、センターの要請で「商品価値のある工芸品を作る」ことを目的に指導していた。が、生徒たちと接するうち

ちに考えが変わった。「まずは手工芸の楽しさを伝え、生徒たちの創造力を高めたいと思います」

技術以前に、作品製作を通して自己表現する意欲や発想力が欠けている、と感じたのだ。リサイクル工芸は、山本さんの目的遂行にうってつけの作業だろう。

最近新たな試みとして、担当する4人の生徒に「共同製作」を指導している。牛乳パックを使っていないで1つ作る。障害を持つために常に人に助けられ、個別行動をしてきた生徒たちは最初、共同作業がう



まくできなかった。しかし、1カ月ほどたつと、隣の人の力が足りない時は分けてあげるといった助け合いができるようになった。社会で生きていく上で大切な学びだ。センターの主要な目的は職業訓練だが、ここで学んだ木工やバイオ肥料作り、造花作りといった技術を生

認識が、まだ低いためだろう。職員が一般に生徒全員に一括して作業を教えるだけでなく、各自の能力や状況に応じた指導をあまりしないことも、就職難の一因かもしれない。これに対して、山本さんは一人一人に合わせた指導をすることで、生徒が自力で作

品を創造、完成していく充実感をつかみ、自己の可能性を広げてほしいと願う。「一人ではできなかった生徒がある日、自分の力でできるようになったことをとても喜んでいる姿を見たときが、一番うれしかったです」

かして就職した生徒は、ほとんどいない。障害者の社会参加と自立に対する社会の



山本さんが紹介したペットボトルを利用した編み機で、マフラーを作る生徒(山本さん撮影)

山本さん(後方)のクラスの子どもたちが苦勞しながら共同製作した牛乳パックいすは、丈夫でしっかりとした作品になった(写真下)





木村さんとセンターの職員、センターに通う患者とその家族たち。皆の間のコミュニケーションが、患者たちの治療の前進を支える

リハビリは 愛情のキャッチボール

「自分にもできるという喜びに溢れる姿」に感動し今の道に進んだのが、もう一人の隊員、木村直子さんだ。

木村さんは05年12月より、パチューカ市から車で45分ほどの町トウランシングのNGO「神経開発専門センター」で、作業療法士として働いている。作業療法士になったのは、高等専門学校卒業後にボランティアをしたフィ

ナオコが好きだから来ているんです。」

大好きな木村さんの指導のおかげで、彼はコミュニケーション力がアップし、幼稚園でも人付き合いがうまくなったと評判だ。

この日はまず、教室のドアに張られた絵のカードの中から、モノを選ぶ作業を行った。「魚はどれかな?」「それは違うわね」。木村さんは正しいカードを選ぶまで何度も、表情豊かに問い掛ける。正解を見つけたら、モノの名前を言う練習をし、用途を尋ねる。

作業が終わると次に、動物の形を合わせるパズルをした。なかなかうまくはまらなくても、忍耐と愛情を持って接する。

言語指導や動作訓練など、木村さんが行うリハビリは、1回平均30分。年齢も性格も障害の内容も異なる複数の患者と、順番に作業



午後2時、患者(右)は木村さんと別れ、迎えに来た家族(左)とともにセンターを去る

リビンの施設で、ある脳性まひの少女と交流したことがきっかけだった。人に面倒を見てもらうばかりで自分では何もできない様子だった少女がある日、何気なく手渡したくして懸命に、しかもうれしそうに木村さんの髪をとかしてくれたときだ。

「自分にもできることがある、と感ずることがもたらす力の素晴らしさを知りました。そ



ダウン症のバス二君と、動物の形を合わせるパズルをする木村さん。常に話し掛けながら、根気よく何度も同じことを指導する

して、障害のある子どもたちがその力を手にするための手伝いができる仕事がしたい、と思ったんです」

木村さんは毎日、脳性まひやダウン症などの障害を持つ患者のリハビリと評価を行う。

患者の一人、ダウン症のバス二君(6)は1年前からセンターに通う、やんちゃで愛らしい少年だ。お母さん(39)いわく、「息子は

を進める。

「患者の子どもたちは本当に愛情深いんです。言うことを聞かず、どうして?、と思うこともありますが、やっぱりかわいい!」

患者との愛情のキャッチボールが、リハビリの成果を高める。

不足を補う知識と創意、 慈愛を伝える

センターには、0歳から30代まで計30人ほどの患者が通う。半数は週に2〜3回回数時間だけ、残りは月々金の朝8時半から午後2時までの間に来る。木村さんはその6割を担当する忙しさだ。

というのも、現在センターは深刻な人手不足に陥っている。常勤は木村さんとメキシコ人作業療法士の2人プラス清掃員だけ。もう1人、ベネズエラ人養護教諭がいるが、パートタイムだ。あとは土曜の午後、応援が1人来るのみ。

センター長で特殊教育専門家のマリア・ロサ・ルーゴさん(40)は、州内に少数しかないプロの作業療法士を十分確保するのは、非常に困難だと話す。

「メキシコではここ数年やっと、テレビで車いす寄付のキャンペーンを行うなど、障害者支援への理解が広まりつつあります。でも、

十分な知識と資格

を持つ専門家はまだ少ないのが現実です」

だから、木村さんが新しい方法や教材を提案し、各患者のニーズに気を配っていることが、ほかの職員の知識と意識の向上に役立っていると強調する。

「ナオコは、体に

合わない車いすを使っている子を見たら、勤務外の時間にタイヤに工夫を施し、使いやすくしてくれました。慈愛の精神が素晴らしい」

メキシコはこれまで、「恵まれた健常者」中心の社会であり続けてきた。政府は近年、国連総会で「障害者権利条約」を提案するなど、障害者支援に積極的な姿勢を見せているが、国内の現実にはまだ十分反映されていない。そんな中、障害者が社会の一員として生きる機会を少しでも増やすために必要な知識と創意、そして慈愛の精神を、山本さんと木村さんは伝えている。



人手不足の中、木村さんは「かわいい」子どもたちとの信頼関係を大切にしながら、患者一人一人の治療に取り組む